ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.11 November 2021

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

11

CONTENTS

・巻頭言
おぢば帰り ②
／永尾　教昭 1

・「おさしづ」語句の探求（49）
「おさしづ」における「道」の用例まとめ①
／澤井　治郎 2

・台湾の社会と文化―天理教伝道史と災害民族誌（4）
天理教教理における海外伝道について
／山西　弘朗 3

・日本語教育と海外伝道（40）
日本語教育と異文化伝道⑤
／大内　泰夫 4

・宗教伝統における聖典の意味構造（9）
シャンカラ派伝統におけるバクティ讃詩とその意義
／澤井　義次 5

・イスラームから見た世界（17）
イスラームから信仰に対する意識を考える②
／澤井　真 6

・天理参考館から（26）
スポーツの歴史と文化（5）「球技」その2
／幡鎌　真理 7

・2021年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（7）
第1講：110「魂は生き通し」
／永尾　教昭 8

・図書紹介（126）
室井光広著
『詩記列伝序説』・『多和田葉子ノート』
／金子　昭 9

・図書紹介（127）
鈴木由利子著
『選択される命―子どもの誕生をめぐる民俗』
／堀内　みどり 10

・おやさと研究所ニュース 11
第80回日本宗教学会学術大会に参加／WCRP平和研究所での月例研究会活動／日本倫理学会第72回大会に出席／オックスフォード大学主催の国際会議で、オンライン講演／2021年度公開教学講座のご案内

巻頭言

おぢば帰り ②

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

イスラム教のマッカ巡礼と天理教信者の「おぢば帰り」について少し考察してみたい。ちなみに天理教のイスラム研究については、イスラム専門家である本研究所の澤井真研究員が本誌上でも幾度か言及している。

世界のイスラム教は一つの教団として統括されているわけではないので当然だが、マッカはぢばのような教団本部の所在地ではない。ムスリムは生涯に最低一度はマッカへの巡礼が義務付けられている。巡礼の意義は、自己犠牲の精神を持って、アッラーに帰依する心を培うことにあるという。そして、それは預言者イブラヒーム（アブラハム）が、子どもを犠牲にしてアッラーに捧げた心に由来するともいう。[1] すなわち、カーバ神殿に詣でること自体もさることながら、道中の様々な困難を克服してマッカを目指す精神修養的な面にも重きが置かれているのだと思う。そういう意味では日本のお遍路にも通じるところがある。ムスリムたちは巡礼を成し遂げることで、身も心も神に捧げて奉仕することを表すことになるのだろう。

一方、「おぢば帰り」も、道中の苦労を克服することにもその意義を見出す人はいる。前号で触れた中川よしもその例だし、今でも敢えて徒歩でぢばに詣でる信者もいる。しかし、それらはあくまでも個々人の自己を律する求道精神の発露であって、そのような一種の自己犠牲を称揚するような教理はないと思う。

むしろ教祖は信者たちに、自らの身を痛める修行的実践を否定している。例えば、一晩中、川に身を浸してからおたすけ（布教活動）に回っていた信者に「この道は、身体を苦しめて通るのやないで」と戒めている。[2]

またイスラム教にはラマダンという断食月がある。一方、天理教の教祖自身は幾度となく断食をしているが、ある信者が参拝できない日に一日中塩気断ち、煮物断ちなどをするのに対して、教祖は、神は可愛い子供が苦しむのを見て喜ぶわけではないと諌めている。[3]

上記に述べた旧約聖書に出てくるアブラハムの献児に類する話が、教祖伝にも出てくる。教祖が「月日のやしろ」になる以前、預かった乳飲み子が天然痘にかかり瀕死の重体に陥った時、教祖は氏神に我が子二人、場合によってはそれに加えて我が身を犠牲にしてでも、その子を救けてもらいたいと祈っている。しかし、これはあくまでも立教以前の教祖の人間性を知る一つの逸話であり、そのような教理があるわけではない。[4]

話を戻すと、「おぢば帰り」とマッカなどの巡礼が趣を異にするのは、ぢばは帰参行程の苦労を体験するということよりも、むしろぢばに参拝すること自体が目的である。さらに天理教の場合、教会祭典日の変更といった教会行政的な用務でぢばに参ることもある。外部から見ればそれは単なる事務的手続きに見えるが、すでに述べたように天理教信者にとってそれは決して俗事にカテゴライズされる事項ではなく、神の許しを得るための聖なるご用に他ならない。加えて、信者が内なる精神の成人と同時に、各種講習会に参加するなどして外形的な成人の階梯（一信者からようぼく、さらに教人、教会長など）を経ていくためにもぢばに帰参する。

［註］

（1）渥美堅持『イスラーム教を知る事典』東京堂出版、1999年。

（2）『稿本天理教教祖伝逸話篇』64「やんわり伸ばしたら」。

（3）同161「子供の楽しむのを」。

（4）筆者は過去に特に人権意識の強い国の人たちからこれに疑問を呈された際、天理教には、他人の救済のために実子の命を犠牲にせよといった教理はないと説明した。